

真蹟の力用

教授 加 来 雄 之
(真宗学)

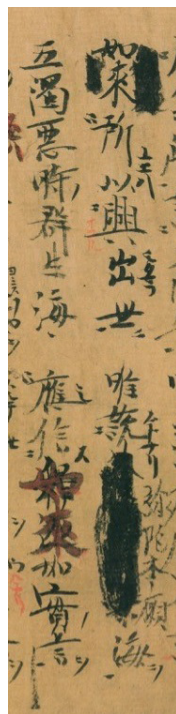
私には、古書の香りを楽しんだり、墨蹟や骨董品を集めるという趣味がない。その私の性質をよく知った、父・玄雄が、鈴木大拙、曾我量深、金子大栄三先生の三筆一軸を大学に寄付したいと連絡してきたときも、正直、適切な判断だと思った。そのような私でも思想表現に全霊をかけた人物の文字（真蹟）に触れるという体験が、私たちの思索にとってどれほど大きな刺激になるかについては疑うことができない。或る思想が活字として印刷されて広く流布していく歴史的な意義はいうまでもない。しかしまた真蹟の文字は翻刻された活字では再現できない何かしらの力用（はたらき）を湛えていることも確かである。

真蹟を見ることの大事さを教えてくださったのは大学院ゼミの恩師・廣瀬泉先生であった。とくに博士課程に入ってから親鸞聖人の『教行信証』の真筆である板東本を中心に、高田本、西本願寺本との校訂をしてからゼミ発表に臨むように指導された。その作業は、活字の読みやすさに親しんだ私にとっては、煩わしく、校訂作業以上の意味を見出せなかった。しかし、真蹟が、文の奥にある思索に出遇わせ、解釈の決定的な指標となることが何度かあった。真蹟が私たちの思索にもつ威力と効用についての、ささやかな体験のいくつかを報告してみたい。

いつ頃からか親鸞聖人の文章を「如来」という概念に立ち返って受けとめるようになった。ところが、ある先輩から「如来」を強調することは浄土教の歴史がもつ教義的な独自性を薄めてしまうのではないかという指摘を

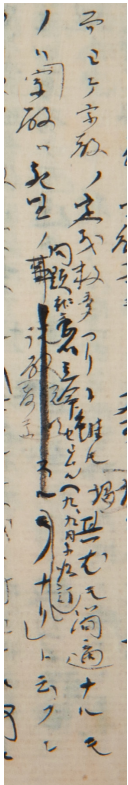


受けた。そうかもしれないと思いながら、親鸞聖人の真蹟で「如来」の用例を見返していくと、例えば、有名な正信偈の「如来」についての書き直し（一つは、何度も他の言葉の候補をあげながら最終的に「如来」の二字を残した箇所、もう一つは、釈迦という字の上から墨で「如来」と上書きし、さらに朱で重ね書きしている箇所）を目にしたとき、親鸞がこの「如来」の二字に託した課題が私の中で確信となった。



大谷大学真宗総合研究所が清沢満之先生の全集を岩波書店から刊行するに当たって、私も編集作業のお手伝いをさせてもらった。坂東本『教行信証』「正信偈」部分 清沢の自坊西方寺に残された関係資料を沙加戸弘教授が中心となって撮影したときも立ち会うことができ、また法蔵

館版『清沢満之全集』全8巻との異同を冬休みの間にすべてをスライド・フィルムでチェックした。また刊行校正のときも改めてプリントされたもので確認しながら作業をすすめた。そのおかげで、現存する清沢先生の自筆はほとんどすべてに繰り返し眼を通すことができた。いまでも清沢先生の文を読むと、その文字がまぶたの裏に浮かんでくる。その中で、先生の有名な求道の記録『臘扇記』についても、活字で読んでいた印象と真筆の筆致とがまったく異なっており、そのズレに愕然としたことがある。私が力を込めて書いてあると思っていた箇所(明治31(1898)年10月24日記)が淡泊に記してあり、自分が重視していなかった警句が太く大きく文字で刻みつけるように記してあったからである。また近年、清沢先生の死生観についてエッセイを書く機会があり、その中で、日記『保養雑記』に出る死生についての思索に違和感があることを述べた。原稿を提出し終えた



ノハ「宗教ハ死生ノ事ヲ説教(説明)スルモノナリ」ト云フニ
問題ニ安心立命セシムル(九、九日に為訂)

而シテ宗教ノ定義数多アリト雖モ其尤モ簡適ナルモ

直後、たまたま、西本祐攝先生より清沢満之の自筆とおぼしき『保養雑記第壹編』が博物館で見つかったので確認してほしいと依頼された。その時、たまたま目にとまった文に文字通り釘付けになった。違和感を覚えていた文が実は三日後に訂正されていたものであったのである。そのとき、はじめて清沢先生の死生についての思索の流れに合点が

いった。

ひそかに師と仰いでいた安田理深先生が命終された後、『選集』をはじめ多くの刊行に関わった。その中で、先生の70歳から82歳で命終されるまでの思索を綴った自筆の随想ノート15冊の翻刻を担当したときは、先生の肉声が耳底に響き、思索のマグマに触れたような感覚をもった。勢いよく書かれた文があり、推敲を尽くしながら書かれた文があり、繰り返される同じ主題・表現であっても、加筆され、訂正され、削除され、赤や青の線が引かれ、書かれた箇所によってその熱量は大きく異なっているのである。近年は、先生が昭和36(1961)年度から昭和41(1966)年まで大谷大学の真宗学で「願生」をテーマに講義された自筆ノートの翻刻をしている。幸い昭和38(1963)年度講義は録音テープが残されているが、講義での語りの質とノートの思索の質、この二つを比較して、講義の言葉が深い思索の地下水の噴泉であることを知った。

經典に「皮を剥いで紙となし、血を墨となし、髓を水となし、骨を折って筆とする」(『涅槃経』聖行品取意)という譬えがある。或る種の人々にとっては文字として刻み込む行為は命よりも大切な営みであったにちがいない。真筆はその営みを刻印している。私にとって真蹟は、翻刻のための資料でもなく、文献学の調査対象でもなく、美術鑑賞の逸品でもない。その人の手によって書かれた文字によって、時空を超えてその人の思索に出会うための契機である。言葉に身命をかけた人々の真筆の文字が私たちに残されていることは、本当に精神世界の宝なのである。

さまざまな真蹟資料を収集し、保存し、翻刻するとともに、影印も公開していくという使命が、真蹟に触れる機会を与えられている者には残されているのではないか。

『保養雑記第壹編』

明治27年9月6日記